

読書の現在

白田 紘

「読書」とは、あたりまえのことだが「書物を読むこと」である。フランス語では読書のことを「レクチュール」と訳すことができる。これを逆に仏和辞典で見ても、読書、読み取り、解読などという訳語が出てくる。もっと細かく見てみると、ほかに朗読や再生という訳もある。ところが、フランスのロベール・フランス語辞典で調べてみると、レクチュールは最初に「読むこと」とあり、次に「テキストを読むこと」という表現が出てくる。このことからすぐに理解できるように、ぼくたちがあたりまえのように書物を読むのだと考えている読書は、実際はテキストを読むことなのである。書物はテキストを運ぶ媒体でしかない。

なぜこのような語釈みたいなことから読書について書きはじめるかというと、読書の現在は、少しずつ変貌を遂げているからである。つまり、読むのはもはや書物とは限らない事態が進行している。電子図書館なるものが存在して、インターネットのウェブ上で文学作品を読むことができるし、出版社ないしその他の企業が携帯端末へ出版物のテキストの有料配信をはじめ、さらにこれからは携帯電話へ連載小説を送信する計画もあるという。また、CD-ROM版の様々なテキストも国内外で製作され、外国の書籍を輸入する書店のカタログをのぞくと、その点数も増えている。今や、書物のテキストだけでなく、ディスプレイ上のテキストを読むこと

が普通になりつつある。それに、コンピュータの普及は、ホームページで小説やエッセーをはじめあらゆる種類の著作物を発表する機会が万人に与えられ、また万人が読むことが可能になっている。ホームページの作品が大手出版社に認められ、これが逆に書物となって刊行されることも行なわれていると聞く。

科学技術の進歩が「読むこと」を変貌させているのは間違いないようである。また、今ではコンパクト・ディスクに録音された文豪の作品を、著名な俳優や場合によっては作者自身の朗読で「聴くこと」もできる時代である。ぼくに關しては、まず詩や小説が録音されたカセット・テープを持ち歩いて、場所を問わずにイヤホンで聴くことができるようになったのをさいわいに、たとえば、フランソワ・グザヴィエ・オフマンの読むスタンダールの『アルマンズ』全六巻の気に入ったパッセージを、歯科医の待合室で聴いたりしたものだ。カセットに較べて、CDはかなり長い作品も収録できて、頭だしも簡単で、繰り返し聴いても擦り減ることもなく、進歩を嬉しく思っている。高齢化社会を迎えて、今後さらに朗読を聴く愛好者は増えるだろうと予想している。朗読と言えば、かつて、第二次大戦後まもなく、ラジオで「私の本棚」という朗読番組があった。書物に触れる機会のない人や読むための時間がない人たちに、朗読によって様々な著作物を提供していたが、これはかなり永く続いていた。(跡見女学校の卒業生で、十年ほど前まで本学で朗読法の授業を担当されていた樫村治子さんが、この番組の中心的な朗読者だった。)まだ中学生くらいのぼくは、母親が仕事をしながらこのラジオ番組で、大岡昇平の『武蔵野夫人』の朗読を聴いていたのを、隣室にいて耳をすまし、ひそかな楽しみにしていたのを思い出す。しかし、朗読を聴く快樂は、それが繰り返し返しの可能なCDによってであれ、テキストを読むのとはまったく異質の受身的な行為で、これはもちろん読書とは別物である。

一般に、読書はテキストと書物と読者によって成立する。言い換えれば、読者が書物という形態のものを通じてテキストを読むことが読書である。ロベール・フランス語辞典のレクチュールの意味も、限定詞のない場合は一般に書物のテキストを読むことを前提としている。読者は書物を媒介にして、書かれたものを受け取る。読書という語を用いるには、「書物」が不可欠である。フランスのある歴史学者は、書物が時代の出版事情を反映し、それがまたテキストと読者の関係も変えてきたことを明らかにしている。

すぐまえの世紀には、戦争のせいでは考えられない書物に飢えるという時期があった。戦中は政府の統制があり、戦後は紙不足から、書物の入手に苦労した時代である。その時代からしばらくして貸本屋が栄えた。フランスでは、大革命後十九世紀はじめに、識字率が向上し出版物も増加したが、書物がまだ高価だったために、やはり一種の貸本屋がもてはやされた。これは多くが会員制で、会員は新聞や書物を店で読んだり借り出したりできた。ぼくはこの「キャビネ・ド・レクチュール」(直訳では読書室)というフランス語を「新聞・図書閲覧所」と訳すことにしている。図書館の普及もあり、この手の店は消滅しているが、今の日本ではさしずめマンガ喫茶ということになるだろう。これはもともと喫茶店や理美容店の待合室で提供していたマンガが、主役に逆転したものと見ていい。別にマンガ本が入手困難だとか、高価だという理由で繁栄しているものではないことは言うまでもない。しかし、マンガのテキストを読んだり絵を眺めたりすることが、読書と言ったら異論が出るだろう。

読書からぼくが思い浮かべるのは、図書館よりも先に、古書店である。大学時代から現在に至るまで、古書店めぐりはいちばんの楽しみである。しかしここでも変化が生じている。ほんとうに古い書物は減少し、ざっ

と目を通しただけと思われる新刊本が並んでいて、しかもどこにでもある軽装本が多い。これではリサイクル店と変らないし、実際、古書店街の神田にも、リサイクル本のチェーン店が進出している。こちらでは、扱う本の大部分が、マンガ本、文庫本、新書本などの軽装本である。

マンガ喫茶にしてもリサイクル店にしても、本の大量消費時代の副産物であろう。書物が売れないという大方の出版社の嘆きはどこ吹く風、一部の出版社では、版を重ね十萬とか百万の単位でマンガ本や軽装本を売りさばっている。そしてその多くはひと時の娯楽ないし情報として読まれ、捨てられるものである。

マンガ本や推理小説などの娯楽本を読むことは、読書と言わないというストリクト（あるいはストイック）な考えがある。近代の日本では「読書」はいつも「教養」という言葉と結びついていたように思う。読書の対象となる書物は、古典と呼ばれるもの、またあらたな知識を与えてくれるようなものを内容として、読者はただ内容を受け取るだけでなく、自分なりの考えを形成し発展させながら、テキストと対話をおこなう。そして書物の紙や活字や装丁などと同時にテキストは記憶に刻まれる。そこにはさらにそれを読んだ場所や時代も付け加わるであろう。

この場合は、一種のスノビズムも介入するのかもしれない。虚栄心から、名著と言われるものを書棚に並べたり、読んでなくても読んだようふりをすることもあったようだ。そこには近代の教養主義の欠点が露呈している。以前は、しばしば雑誌などで著名人にアンケートを行ない、読むべき書物の一覧が掲載されたりしたものだ。それがはたしてどのくらいの影響力を持っていたか知らないが、多くの場合、アンケートに答える著名人の読書傾向や、その人物を知る一助になっていた。いずれにしても、読書が虚栄になっていた時代は終わ

った。現代では、羞恥心がないと指摘する人もいるようだが、立派なおとなが電車の中でマンガ本を広げたりもしている。流行にならうために本を広げても、教養を掲げて書物を開かないのが現代である。

しかしこのところ書店で目に付くのは、古典のダイジェスト本である。これは一体どういう現象なのだろうか。就職試験に備えるためでもなさそうであり、教養を付け焼刃するためでもなさそうだ。こうしたあらしじを読んで、それに触発されて実際にオリジナルを読むことがあるのだろうか。ほくは今そのあたりを見極めたいと思っている。